

中ソ関係三〇年の起伏を展望

——一九六〇年が決裂の分水嶺、

——鄧小平のモスクワ演説が烽火——

田 村 幸 策

目 次

- | | |
|----------------|-----------------|
| 一 中ソ友好同盟相互援助条約 | 六 第三回ルーマニア共産党大会 |
| 二 フルシチョフの北京訪問 | 七 ソ連建国四三周年記念大会 |
| 三 第二〇回ソ連共産党大会 | 八 原子爆弾は張り子の虎 |
| 四 ソ連建国四〇周年記念大会 | 九 総 括 |
| 五 フルシチョフの北京訪問 | |

△中ソ友好同盟相互援助条約

一 一九四九年一〇月一日北京に毛沢東の共産政権が樹立され、翌日、ソ連の法的承認をうけた。二カ月後の一二月一六日毛沢東はスターリン生誕七〇歳の祝賀会に参加の名目でモスクワを訪問し、満二カ月間滞在し、スターリンとの秘密交渉の結果、二月一四日極めて重要な四種の協定を結んで、二月一七日モスクワを出発帰国の途についた。

中ソ関係三〇年の起伏展望(田 村)

第一種の協定は「中ソ友好同盟相互援助条約」であつて目的は「日本帝國主義の復活と日本または日本と連合する國の侵略を共同に防止」するためとあり、それがため「締約國の一方が日本または日本と同盟する他の國から攻撃をうけ、戦争状態に陥つた場合、他方は直ちにあらゆる手段をもつて、軍事的その他の援助を与える」こと、「締約國の一方は他方に反対するいかなる同盟をも結ばず、また他方に反対するいかなる連合、行動または措置にも参加しない」こと、「締約國は共通の利害に関するすべての重要國際問題に対し相互に協議する」こと、「締約國は平等、互恵、國家主權と領土保全に対する相互尊重、國內事項に対する不干渉の原則に従い、經濟的および文化的連携を發展強化し、相互にあらゆる可能な經濟的援助を与え、かつ必要な經濟的協力を約束する」こと、「締約國は大戰爭中の同盟諸國とともに、できうる限り短期間に日本との平和條約締結に努力を約束する」とある。有効期間は三〇年であるが、期間満了の一年以前に、いずれか一方が廢棄通告を行わなければ、そのまま更に五年間効力をもち、それ以後もこの規定に従つて順次延長されることになっている。

第二種の協定は一九四五年八月一日四日スターリンが蔣介石と結んだ「中ソ友好同盟相互援助条約」、「中國長春鐵道」および「旅順と大連」に関する協定との三つの取極の「失効」を宣言し、更に中國が「蒙古人民共和國」の獨立を承認した交換公文であつた。

第三種の協定はソ連が中國に与える「借款」に関するもので、三億ドルを年利一パーセントで、一九五〇年一月一日から五年間に毎年五分の一つづつ供与し、ソ連から中國に引渡す発電所、冶金工場、機械工場の設備、鉅山設備(石炭と鉅石)、鐵道その他の輸送設備、レール、その他中國の國家經濟の回復と發展のための資材に対する支払に使用されるとあつた。これに対し中國はその借款と利子とを原料、茶、金、ドルをもつて返済する。原料と茶の価格は世

界市場を基礎とする。借款返済の方法は総額の一〇分の一つづ毎年年末までに一〇年間に支払い、第一回の支払は一九五四年末で一九六三年末を最終とする。但し利子の支払は六カ月毎に行うとあって、相当厳しい借款条件である。

第四種の協定は二つの事項を取扱ったもので、その一は「中国長春鉄道」の共同管理権を鉄道所屬の財産とともに、無償で中国に移譲することで、その移譲は日本の平和条約締結後直ちに行い、一九五二年末より遅れてならないと規定し、その二はソ連軍が中国と共同使用中の「旅順海軍基地」から一九五二年末より遅れることなく撤退し、旅順区域の施設を中国に引渡すことを規定したものである。但し「中ソいずれか一方が、日本または日本と連合するいづれかの国の侵略をうけ、軍事行動に卷込まれた場合、中国の提議とソ連の同意とによって、中ソ両国は共同作戦を行うため、「旅順海軍基地」の共同使用ができることになっている。

なお「大連港」の問題は日本との平和条約締結後に審議することに合意したが、大連の「行政」は完全に中国に属すること、また現在大連でソ連が管理または借用中の財産は、一九五〇年中に中国に引渡を完了しなければならぬ約束になった。

しかし中ソ間に同盟条約を初め一連の協定が成立してから四カ月後の六月二五日朝鮮戦争が勃発し、ソ連が訓練し組織し援助した北鮮軍が、開戦後二カ月余にして全滅したため、中国が「義勇軍」の名の下に正規兵を派遣して戦争の継続を引受けるに至ったため、一九五二年九月一日モスクワでソ連軍の「旅順海軍基地」からの撤退期限を、中ソ両国が各々日本と平和条約を結ぶ時まで「延長」する合意が成立したのである。

① 毛沢東の一行は首相兼外相の周恩来、満州の副主席李富春、新疆の副主席賽福鼎であった。両地は歴史上中ソ両国の紛争が繰返された国境
中ソ関係三〇年の起伏展望（田村）

の接触地域である。

② ロシアが中国との間に日本を仮想敵として結んだ第三回目の同盟条約である。第一回は日清戦争に敗北した李鴻章を誘惑して結んだもので、満州に「鉄道と銀行」を経営する権利をロシアに与え、遂に全満州を上領される結果を招いた。第二回は今回「失効」になったもので、同一のスターリンが別の中国政府（蒋介石）と結んだものである。

二 毛沢東のモスクワ滞在中、金日成もスターリンを訪問し、南朝鮮を李承晩の悪政から解放する計画を持込み、その承認と援助とを求めつつあった。スターリンは金の冒険がアメリカの干渉を招くことを心配し、毛沢東の見解を求めたところ、毛は金の提議に賛成し、アメリカの干渉はない。理由は金の企てが朝鮮人相互間の国内問題だからだと答えた。これによると朝鮮戦争はモスクワでのスターリン、毛沢東、金日成三者間の共同謀議に基く事実が立証される。しかし三年一カ月間継続した朝鮮戦争は、当初の二カ月間を除けば全部「中国の戦争」であったが、中国軍の武器弾薬、被服、食糧などはソ連の供給にかかり、実質的には米國に対する中ソ共同戦争たるに拘らず、血税を中国のみに支払せながらソ連の供給物資が有償であったことがやがて中ソの乖離を招く原因の一を構成している。

三 毛沢東がソ連から帰国すると間もなく、台湾前面の福建省には、中国解放軍の集結が開始され、沿岸には多数の上陸用舟艇が準備され、蒋介石政府の命運は風前の灯のごとしとすら伝えられた状態が発生した。しかし毛沢東による台湾の「武力解放」は、朝鮮戦争と相俟って決行される戦略であった。スルーマン大統領が朝鮮戦争開始直後、第七艦隊をフィリッピンから北上せしめ、毛沢東の台湾侵攻を阻止せしめると同時に、蒋介石の中国本土侵攻をも阻止せしめたのは、機先を制した快挙であった。

以上の事実を総合すると毛沢東の訪ソは、直接中国とソ連とに関係ある重要問題の解決のみならず、同時に「朝鮮の武力統一」と、「台湾の武力解放」とが、スターリンと毛沢東との間に討議されたことにならざるをえない。

四 毛沢東はモスクワ出発に当り「すべての人は既に同盟条約によって強固になった中ソ兩國民の團結が永久的なものであり、いかなる国民によっても破壊、分離されえないことを理解できたはずである。かかる團結は中ソ兩國の繁榮に影響あるのみでなく、人類の将来と世界の平和と正義との勝利にも影響すること確実だ」と声明し、かれの帰國後「人民日報」は社説で「歴史の新時代が樹立され、世界人口の三分の一を擁する中ソ同盟は、帝国主義者の侵略に反対する征服しがたい同盟である。この同盟は日本および日本と直接間接連合する他の諸國が侵略を繰返し、世界平和を破壊することを有効に防止する。故にこの同盟は現在日本による侵略の再現を育成しつつあるアメリカ帝国主義に対する手痛い打撃である」と論じ（二月二六日）、同日の「プラウダ紙」も特別論文で「現在日本の反動主義者たちは、アメリカ占領軍当局の庇護の下に、ますます狂信的になり、無鉄砲になって、復讐の企てを公言している。現在アメリカ帝国主義は全力をあげて、日本を中ソ兩國に対する攻撃の戦略的橋頭堡に変更しつつある」と主張した。

五 世界最大の人口を擁する中国を共産陣営に迎えたスターリンが、世界赤化の大野望の見地からも喜ばざるをえないと同時に、毛沢東が「ソ連における経済、文化その他重要な発展の経験が、中国再建の模範になるとの歴史的信念を確認」したと喜んだのも当然である。しかし第二次世界大戦後ヨーロッパに出現した七カ國の共産政権は、ユーゴを除けば、いずれもソ連軍の占領下でソ連官憲によって強制的にデッチあげられた政権であつて、自発的な革命運動の成果として勝ちとつたものでなく、新政権の指導者はいずれもモスクワが指令し、しかも多くはロシアに亡命中の者を帰國させて、その地位につかせた者たちにすぎない。ヨーロッパ諸國の共産政権はクレムリン宮で誕生し、クレムリンの指令で養育された存在で、モスクワの指導権に挑戦を許されない弱い立場にあるもののみたることが特

色である。

これに反し毛沢東政権の成立過程は、全然、歴史を異にし、全くソ連の援助なしに独力で成し遂げたといえ、あるいは言い過ぎになるかも知れないが、スターリンとしては最後の瞬間まで、毛沢東が政権の獲得に成功すると信ずることに踏切がつかず、用心深く蔣介石政府との接触を断絶しえなかったのは争うべからざる事実である。その最も有力な証拠は日本が満州に残した巨大な重工業施設をスターリンが「戦利品」と称して大部分をソ連領内に運び去った所業は、スターリンがソ連軍の満州撤退後、満州の主人になる者が蔣介石でなく、毛沢東だと考えたのであれば、絶対にとりえない措置でなければならぬからである。従って毛沢東にとっては自己の政権が、ヨーロッパのソ連衛星諸国のごとく、モスクワ製のものでないことが大きな誇りであって、その矜持を汚されることはかれにとって許しえないことである。ユーゴーのチトーすらモスクワの衛星国たることを峻拒しつづけている。況んや毛においておやである。毛は共産主義者としての閥歴もソ連の指導者たちに比較して劣らないのである。特にスターリンの中国共産党の指導歴史はむしろ失敗の記録であって、かれの誤った指導のため中国共産党は一再ならず非常な痛手を負わされているのも争うべからざる事実である。一九五四年採択の中国憲法も「偉大なソ連および人民民主主義諸国との間に揺ぎなき友好関係を打立てた」とはあるがソ連衛星諸国の憲法のごとく、ソ連の援助に感謝する文字は発見できない。この建国の歴史と毛の個人的矜持とがロシア人に完全に理解されていなかったことが、中ソ間の分裂に一役かっていることは否定しがたい。

△フルシチョフの北京訪問

(一九五四年一〇月)

一 一九五三年三月五日スターリン死去、マレンコフが首相と党第一書記とを兼任したが、同年九月一二日フルシチョフが正式に党第一書記に選任され、多彩なフルシチョフ時代が開幕された。しかし敏捷なかれはスターリンの葬式に、周恩来がソ連の最高幹部三人とともに棺側を歩む別格待遇を与えられたことを忘れなかった。中国との提携、協調に最先順位の重要性をおき、一九五三年五月には中国に対し九一のプラント建設を援助する決定を行った。九月一五日毛沢東はソ連政府に感謝状を送り、「中国の工業化、社会主義への段階的移行、ソ連を首位とする平和と民主主義陣営の強化に極めて顕著な役割を演ずる」とのべた。

二 一九五四年九月二九日—一〇月一二日フルシチョフは北京を訪問し蒋介石時代にスターリンが奪取した中国における特権を清算するかのごとく、一〇月一二日三種の文書が調印された。第一種はソ連軍が中国と共同使用中の「旅順海軍基地」から一九五五年五月三一日までに撤退を完了し、その施設は無償で中国側に引渡すこと、第二種はインドシナの問題を解決したジュネーブ会議に中国の参加は重要な意義あること、台湾、朝鮮、「東南アジア集団防衛条約(米英など八カ国参加、九月八日マニラ調印)の各問題に触れ、アジアと太平洋地域における各国の主権と領土保全の相互尊重、相互不侵略、相互内政不干涉、平等互惠、平和共存の諸原則の厳守を宣言したもの、第三種は「日本」に関する共同宣言であって、「中ソ両国は日本との正常関係回復の措置をとる用意あること、日本が両国と

政治および經濟關係の樹立を希望することは、兩國の全面的支持をうけ、また日本が平和的かつ独立的發展に必要な条件をつくらんとする措置も兩國の全面的支持をうける」と日本に呼びかけたものである。

情報によるとフルシチョフはこの際新に中国に五億二千万ルーブルの長期借款を与えたとあるが、詳細な条件など不明である。ソ連は更に中国が新にソ連との連絡鐵道を建設することを援助するとあるが、これまた細目は報じられていない（しかし別の情報によると日付はちがうが、一九五六年四月ソ連はミコヤンを中国に派遣し、蘭州—ウルムチ—アクトガイ鐵道の建設援助のため借款を与えたとある）、ソ連はまた中国と合併で組織した株式会社（複數）の株式を放棄するともあるが、内容は不明である。

一〇月一二日フルシチョフは北京を去るに当り、長文の声明を発表し、「相互間の意見の交換は、兩國この上の發展に関するすべての問題と、すべての國際問題とに対する完全な相互的理解を示す」とのべた。

三 一九五五年二月八日のソ連最高會議はマレンコフ首相とモロトフ外相との辭職を承認すると同時に、外交政策に関する長文の声明を行なつたうちに、「第二次世界大戰の最重要結果は、世界的資本主義陣營と並んで、「ソ連」を「首長」とする、より正確にいえば、「ソ連と中国」とを「首長」とする社会主義と民主主義の世界的陣營が形成された」ことだとある。いかに中国をソ連と同等な「首長」にすることを躊躇したかが窺われる。

この年四月四日満州担当の副首相高崗が反党分派をつくり、満州を独立の王国にせんとしたため党を「追放」され自殺したと発表された。

四 一九五五年七月五—六日李富春副首相は全国人民大会での「第一次五年計画」（一九五三—五七年）の報告において、「ソ連が約束した一五六の工業プロジェクトの主要な部分を構成する九一プロジェクトの、第二次グループが

最終的に決定したのは漸く一九五三年五月であった。ソ連が援助した第一次グループの五〇プロジェクトが決定され、建設が開始されたのは一九五〇年であった。しかし中国は後進的な大国であって現実の状態からすると、社会主義工業化の基礎的事業を充実するにも、五年計画を三回重ね約一五年を必要とする。毛沢東主席も高度な社会主義工業化をもつ強国をつくり上げるには、四〇年か五〇年、今世紀全部の努力を必要とするのべている。われわれは工事建設に主力を集中しなければならぬ。それには六九四のプロジェクトが含まれ、その核心はソ連がわれわれのため立案してくれた前記の一五六のプロジェクトである。ソ連は最初から終りまで全過程を助けてくれている。ソ連の設計は最新式の技術的業績を広汎に利用し、すべて一級品を提供し、われわれを助けつつあるソ連の労働階級も最熱心である。更にソ連は中国から多数の学生と練習生を受入れ、勉強と実務にあらゆる便宜を与えている。ソ連はまた一連の借款を最好条件で供与して中国の財政を助け、安価で技術的な備品や資材を提供している。ソ連の外にポーランド、チェコスロバキア、ハンガリー、ルーマニア、東ドイツ、アルバニアのごとき人民民主主義諸国からも経済的、技術的援助をうけている」とある。なおこの訪問中にソ連側から中国の失業者救済のためシベリア開発に百万の中国労働者の受入を提議したところ、当初毛沢東は国家の体面上かかる奴隷労働的のものに反対したが、遂に二十万人を送ることに同意した。フルシチョフによると毛沢東は多数の中国人をシベリヤに定着させ「闘争によらずシベリヤを占領」する魂胆だと感じ、二十万の労働者は契約期限とともに厳重に帰還を主張したとある。

ソ連が中国に与えた経済的援助の規模と性格に関し、一九六四年二月一四日スースロフがソ連の党中央委員会での報告によると、「ソ連は短期間に中国に新式機械を備えた二百以上の大工業企業、作業場、その他のプロジェクト建設を援助した。中国はソ連の援助によってこれまで持つていなかった全工業部門、すなわち飛行機、自動車、トラックの製造工業、動力機械、重機械、精密機械製造工業、計器製造、無練機械、各

部門の化学工業がそれである。中国はソ連の援助によって建設改造された工場により、年額八百七十万トンの銑鉄、八百四十万トンの鋼鉄、三千二百二十万トンの石炭と頁岩の生産を可能にした。中国における錫の生産高の七〇パーセント、合成ゴムの百パーセント、電力の二五―三〇パーセント、貨物自動車とトラックの八パーセントは、ソ連の援助によって建設された企業の産物である。ソ連の技術的援助によって建設された国防関係の工場は、中国の国防関係工業の中核体である。一九五〇年―一六〇年間に、一人以上のソ連専門家が種々の雇用期間で中国に派遣され、一九五一年―六二年間に約一万人の中国人技師、技手、熟練労働者と、約千以上のソ連の科学者がソ連で教育と実習をうけた。この期間にはまた一万人以上の中国の学生と大学卒業生とがソ連の高等教育機関を卒業した。中ソの協力はソ連共産党とフルシチョフの発議によって、スターリンが押付けた両国関係の不平等が取除かれた一九五三年以後にピークに達した。一九五七年毛沢東は中国問題における不愉快な無関係な付属物を取除いたことはフルシチョフの名譽になるとべている。一九五九年には中ソの経済的接触は一九五三年の二倍近くになった。建設プロジェクトのための資材引渡はこの期間に八倍にも達している。一九五四年から一九六三年間にソ連は中国に二万四千の科学のおよび技術的文書を引渡している。その内には千四百の大工業企業のプロシエクトに関するものが含まれている。これらの文書はソ連の人民とソ連の科学者、技術者たちによって集められた莫大な経験が含まれている。これらすべての科学的、技術的文書は無償で中国に引渡されたものである。ソ連は総額十八億一千六百万ルーブルに達する長期借款を好条件で中国に与えたとある。」仮りにこれらの援助が事実行われたとしても、ロシア人のあげた「数字」だけは魔物とみなさざるをえない。現にこの年一二月周恩来が全国人民大会での報告には、ソ連からの「借款」は十四億六千万ルーブルとある。ともかくフルシチョフは一九五八年五月には一切の対中国援助を拒絶することになる。

△第二〇回ソ連共産党大会

(一九五六年二月)

一 一九五六年二月一四日クレムリンに開かれたソ連共産党第二〇回大会は、フルシチョフ時代最初の大会であつて、スターリン三〇年の陰暗危険な政治を清算し、新鮮明朗な政綱をかかげて人心を収攬する必要がある大会であつたが、その目的は十二分に達成されむしろ行き過ぎの感すらあつた。フルシチョフの基調演説は開口一番現代の國際的發展に関する根本問題たる、「資本主義体制と社会主義体制との平和共存」、「戦争防止の可能性」、「異なつた諸國間

における社会主義への移行形態」に触れたいと前提し、第一の「平和共存」に関しソ連はこれを戦術的、方便的に使用しているのではなく、ソ連外交政策の基本原則だと説き、ソ連は革命の「輸出」によって資本主義を倒さんとしていない。二つの体制の競争において社会主義が勝利するわけは、社会主義的「生産方法」が資本主義的生産方法に対し、決定的優越性をもつからだと言張し、新しい社会機構の樹立は各国の国内問題だと、平和共存の原則がますます広く国際的承認をうけているわけは、現在の条件下で他に活路がないからだと言断じ、事実、「平和共存か、史上最大の破壊的戦争」かの二途あるのみで、第三の途はないと言切り、更に体制を異にする諸国が、単に隣り合って生存するだけでなく、進んでその関係を改善し、相互信頼を強化し、協力を増進しなければならない。中国とインドが提唱し、バンドン会議と国際世論とに支持されている有名な「五原則」の歴史的意義は、それが最善の相互関係方式を決定しているからだと言明した。

第二の「戦争防止の可能性」に関しては、全世界の人々が新しい戦争はさげえないものか、再度の世界戦争を経験した人類は更に三度目の世界戦争を経験せねばならないのかと問いかけている。マルクス主義者はこの質問に答えねばならない。「帝国主義の存在する限り、戦争は不可避というのが、マルクス・レーニン主義の命題」だが、こんな命題が提唱されたわけは、帝国主義が普遍的な世界体制であって、他方、社会的、政治的勢力は弱く組織は貧弱で、帝国主義者に戦争を放棄させえなかつたからである。しかし現在では事態が根本的に変化した。世界的社会主義陣営が結成され、強大な勢力になった。この陣営は侵略防止の精神的物質的手段になっている。更に資本主義諸国の労働運動は巨大な勢力となり、平和擁護運動の強力な要因になっている。だが帝国主義が存在する限り、戦争発生の「経済的根拠」が依然存続するとのレーニンの命題は有効だ。地球上に資本主義が残っている限り、独占資本主義の利益を

代表する反動勢力は、今後も軍事的冒険と侵略とを志向し、戦争を仕掛けようとする。しかし「戦争の宿命的な不可避性はない」。今や強力な社会的、政治的勢力が存在し、帝国主義者らの戦争挑発を許さない重大な手段をもち侵略者たちに殲滅的打撃を加え、冒險計画を粉碎できる諸国民が、より積極的に平和を擁護すれば、それだけ新戦争防止の保障が大きくなると主張した。

第三の諸国における「社会主義への移行」に関しても、世界的舞台における根本的な変化に関連して、新しい展望が開けつつある。レーニンによると「すべての国家は社会主義へ到達する。それは避けられない。しかし全部が全く同じ途をたどるのではなく、各国はそれぞれ各自の民主主義の形態、各自のプロレタリア独裁の型、社会生活の種々な面における社会主義的改造のテンポによってなんらかを貢献するのである。故に史的唯物主義の名において、単調な灰色で自己の未来を描くことほど、理論的に幼稚で、実際的におかしくないことはない。その結果はいい加減な楽書き以上のなものでもない」とある。歴史的経験はレーニンのすばらしい教訓を完全に確認している。社会主義路線の上に社会を造った「ソ連型」と並んで、今では「人民民主主義型」がある。「社会主義建設の上において大したユニークなものを貢献しているのが中国である。革命の勝利以前の中国経済は著しく後進的、半封建的、半植民地的性格のものであった。人民民主主義国たる中国は、決定的な司令的地位を社会革命に使用し、私的産業と貿易との平和的再組織政策を実施し、漸進的に社会主義経済の構造に変形しつつある。」中国の社会主義再建の大義を指導した人たち並にその他の人民民主主義国の共産党および労働者は、それぞれ各国の独自性や特殊性を考慮してマルクス主義を創造的に行動に示したものである。社会主義への移行には更に「他の形態」が現われる可能性もありうるが、これらの形態の実行を、いかなる場合でも「内乱」と結びつけて考える必要はない。われわれの敵はどこでも、いつでも、

レーニン主義者を「暴力」の主張者と描いている。われわれが資本主義社会を社会主義社会に「革命的な変形」の必要を認めていることは事実である。これが「革命的マルクス主義者」を「改良主義者」や「日和見主義者」と区別する。多数の資本主義国において、ブルジョアの独裁を「暴力」でくつがえし、それと関連して「階級闘争」の激化は避けられない。しかし社会革命の形態は種々あるのであって、「暴力」と「内乱」とを、社会改造の「唯一の途」とみなすことは真実でない。

これに関連して「議會的手段」の利用による社会主義への移行が可能かの問題が発生する。現在多数の資本主義国における労働階級は、人民の圧倒的多数をかれらの指導下に統一する真の機会を提供している。かれらがかかる勢力を糾合しうれば、反動分子を破って「議會で安定した多数」を獲得し、議會をブルジョア民主主義の機関から、人民の意志の真正な機関に移行させることができる。しかし資本主義がなお強く巨大な軍事的、警察的機構を保有する諸国では、反動勢力が甚しく抵抗することは不可避である。社会主義への移行は激しい「階級的、革命的闘争」を伴うのである。いかなる移行形態にせよ、決定的不可欠な要件は前衛たる「党」を先頭とする労働階級の政治的指導である。それがなければ社会主義への移行はありえないと結んでいる。

二 第二〇回党大会が世界共産党運動史上、輝かしい位置を残した理由は、フルシチョフが初めて公式に、全世界の共産党のリーダーとして、右の「三つの重要なテーゼ」を敢然と提起したことにある。しかるに幸か不幸かこれら三つのテーゼは、いづれも毛沢東の是認するところとならず、日を追ってこれら三問題が、中ソ両党間における激しい論争の対象を構成するに至った。これは通俗に「イデオロギー論争」とか、「言葉の戦争」にすぎないものと取扱っているが、実はそのいづれも中ソ両大国の重要国策と密接に結びついている危険な問題たることを見逃してならぬ

い。けだし三つのテーゼのいずれか一つに對し、どちらかの解釈を採用するかによつて、国防、治安、經濟、外交など、直接國政の運営に重要な影響を与えねばやまないからである。

三 フルシチョフは大会の基調演説でかくのごとく極めて重要な三大テーマを展開するのみならず、秘密會議（二月二四日と二五日）において前任者スターリンのテロ的虐政を具體的事実をあげて暴露し、「一人の個人を仕上げ、それを神に類する超自然的性格をもつ超人に変形したことは、マルクス・レーニン主義の精神に反する」とし、「かかる人はあらゆることを知り、あらゆることを見透し、すべての人に代つて考え、なにごとでもなしえて、しかも決して過誤をおかさない人物として崇拜することは有害な結果を招く」とスターリンに對する「個人崇拜」の強制を厳しく攻撃した。しかし基調演説の三大テーゼに反對した毛沢東は秘密演説のスターリン批判にも反對であつた。フルシチョフ演説から二カ月後の同年四月、毛沢東はミコヤンとソ連大使を引見した際、「スターリンの長所はかれの短所にまさる」と告げ、スターリンの「全面的評価」が必要だとのべ、一〇月二三日にもソ連大使に「スターリンは批判に値いするが、われわれは批判の方法に同意しない。そこにはわれわれの同意しない若干の他の事柄がある」と語り、一月三〇日にはソ連大使に「スターリン執権時代の基本的路線は正しかったが、敵に對して使用した方法を同志に對して使用してならない」とのべた。毛沢東の見解はフルシチョフの著しく蔽しい一方的なスターリン観よりも、客觀的な判断であつたとの弁護論もある。

四 フルシチョフの秘密演説は全く意外かつ重大な波紋を巻き起した。その一は一九五六年六月二八日ポーランドのボズナンに労働者による重大な暴動が起つた。かれらは街頭に出て官公庁の建物を攻撃するなど容易ならざる事態に發展した。フルシチョフは武力干渉を考えたが、周恩来からポーランドへの軍事行動に反對するとの建言があつた

のみならず、ロコソフスキー元帥（ソ連軍の司令官でポーランドの国防大臣を兼任）から、ポーランド軍がソ連に敵対的であり、しかも背後に前党書記長ゴルムカが軍と一団になってソ連軍と闘うとの警告をうけたため、遂に平和的に処理することに成功した。八月四日ポーランド共産党はゴルムカを「復讐」さす決定を行った。

波紋の二はポーランドの動乱から四カ月後の一〇月二二日、ハンガリー首都ブダペストの「建築技術大学」の学生たちが、祖国を愛するハンガリー青年の自発的運動の結果として「一六カ条」の決議を行い、翌二三日午後二時半を期し、ポーランドにおける自由のための運動に同情するためベム・テールの像までの行進に、他の大学生殊に工場の労働者たちに参加をよびかけた。驚いたことはこの行進に二十万人以上の参加者を発見したことであった。大学生たちが点火した烽火は燎原の火のごとく、たちまちハンガリー全土に拡大し「反ソ反共」の大動乱に発展し、文字通り老若男女をあげて自由と独立のために立上った。ゲロー政権はハンガリーの軍隊と警察を動員したが、かれらは逆に兵器を学生たちに引渡すのみならず、学生たちの運動に参加する者もあつた。大衆の要望に答えて生れたナジイ政権は、ソ連軍全部のハンガリー撤退を要求した。フルシチョフにとって歴史的な瞬間であつた。一応首都からはソ連軍を引揚げさせたが、果して「反革命」を成功させてよいかが問題である。フルシチョフは最先に中国に相談したところ毛沢東は劉少奇をモスクワに派遣した。劉はソ連軍をハンガリーに送って断圧する必要がある。ハンガリー労働階級をして「反革命」を処理さすべきだと主張した。フルシチョフも一旦はこれに同意したが、かれは容易に最終的な決心がつかず、最高幹部会に計ったところソ連が傍観してハンガリー共産党の支持を拒否することは許せないとの決議であつた。しかし武力干渉に反対する劉少奇は既に帰国のため空港にあるので、最高幹部会の全員が空港に赴き劉の同意を求めたところ、かれはこの瞬間毛沢東の同意をうることはできないが、毛も干渉を支持するものと考えるか

ら、北京に到着次第中国党政政治局に報告し、その結果を取次ぐが、ソ連は中国の支持をうけうるものと考えて、よろうと養成の回答を与えた。一月一日ソ連の精銳部隊がハンガリーに侵入、一月四日首都ブダペストを攻略した。ナジール首相は一旦ユーゴー大使館へ避難したが、だまされてソ連軍に捕えられソ連で死刑にされた。

ハンガリー人一万五千戦死、大部分は二〇歳以下の青少年であった。中国はソ連がポーランドへの武力干渉は阻止しえたが、ハンガリーの「反ソ反共動乱」にはソ連軍の弾圧に同意せざるをえない結果になった。

△ソ連建国四〇周年記念大会

(一九五七年一月)

一 一九五七年八月二六日ソ連は「大陸間弾道ミサイル」の実験に成功し、続いて一〇月四日には世界最初の「人」衛星(スプートニック)の打上げに成功し、得意満面たるフルシチョフは、一〇月一五日中国との間に「国防新技術協定」を結び、ソ連が中国に「核兵器の設計図と核兵器製造技術資料」とを供給することを承諾した。中ソ親善のピークと形容して過言でない。しかしこの超最高秘密協定は一八カ月後にソ連が一方的に破棄した。

二 一九五七年一月七日はレーニン政権生誕四〇年に当るので、モスクワの祝賀会には国際共産運動のすべての領袖(六四カ国)たちが参集し、毛沢東もその一人であったが、これは中国にとって偉大な瞬間であった。中国はこの会議で初めて、世界共産主義運動における政策作成に強力な発言権をもつ大共産国として現われ、ソ連と協力して有名な「モスクワ宣言」の原案起草の榮譽を与えられたからである。

モスクワに参集した「非共産主義諸国」の共産党代表たちは、総会祝賀大会の終了直後、別に一二の「共産主義諸国」の会議が開かれるとは知らされず、工場とか集団農場の見学に案内されていた。一二の共産主義諸国の代表たちはモスクワに残り、ソ連が立案し中国が既に承認していた宣言案を示された。当時のフルシチョフにとって中国は不可欠な存在であった。

モスクワ大会に出席のゴムルカはポーランド党に対するソ連の君主的地位を承認するいかなる文書にも調印しない決意であり、それを中国が背後から支援してくれるものと期待していたところ、宣言案はソ連がこれまでよりもきつい、より闘争的、空論的態度に復帰したことを発見したので、宣言案を修正さすため毛沢東のみならず、ユーゴーとハンガリーの党首をも説得したが、ロシアとの関係において新しい地位を承認された毛沢東が、フルシチョフに同調していたのを発見し真に深甚な失望を感じざるをえなかった。

三 宣言そのものは一月一四日の大会に提出されたが、非共産主義国の党代表には発言権がなく、かれらは最初の二日間、「宣言」と同時に発表されるはずの「平和マニフェスト」の作成に没頭していた。「宣言」は討議を行わず、そのまま承認することを要請された。事実ユーゴーを除く全部の代表はいわれるままに行動した。高度な共産主義政策をかかげたこの「宣言」(五、〇〇〇語)は、二年以前の第二〇回ソ連共産党大会でフルシチョフ自身が行った報告よりも、よきよきしい好戦的調子のものであった。しかしこの宣言は後日「一九六〇年の声明」とともに、それを繞って中ソ両国間に紛争を巻き起すものとなっている。その性格はポーランドとハンガリーの叛乱、スエズの動乱を経験したモスクワがその態度を硬化し、大なる紀律を押し付けんとする気持をもった当然の結果だからである。かれはまた共産世界全体が甚しく動揺していることを知っていた。

四 今回の「宣言」は第二〇回党大会のテーゼと甚しくかけ離れたものではなかった。しかしルーズナ文句を引締め強調する場所に重要な変更を加えたが、(一)「戦争は宿命的に不可避でない」点はそのまま保持され、また(二)ある場合共産主義は「平和的手段で達成」できるとの主張もそのまま保持したが、平和的過程による場合は資本主義の進歩した諸国に制限され、暗にアジア、アフリカ、ラテンアメリカの未開発諸国の共産主義者たちには「暴力」の使用を余儀なくされることが期待されていた。(三)残存する植民地諸国並に西欧が経済的に支配する地域における「民族解放運動」の力学には強い語勢が加えられている。一般的に帝国主義に対する態度は極端に非妥協的、攻撃的である。最後に「宣言」は共産主義運動内における「独断主義」(dogmatism)と「修正主義」(revisionism)との闘いにおける「警戒」を新にすることを声高く呼びかけている。両主義とも害悪の雄だと烙印を押されたが、「宣言」によると、当時の実情では「修正主義」が「独断主義」より大きく直接的な危険だとある。これを要するに「一九五七年のモスクワ宣言」を一言で評すれば、好戦的な共産主義者の意図と共産世界内に厳格な紀律の必要性とを説いた戦闘的、非妥協的声明といえる。フルシチョフが第二〇回党大会で打出した実践的な三つのテーゼ、すなわち「戦争の非不可避説」、「暴力なき革命」、「社会主義への移行に異なった途」は、そのまま残ったが著しく制限を加えられた。就中、この「宣言」は非共産世界に対するイデオロギー的戦争宣言であった。なお重要なことは、中国がこの宣言の調印者たるのみならず、ロシアとともに宣言の共同スポンサーとして行動したことである。これは詩的表現で、ソ連の大陸間弾道ミサイルの開発、人工衛星の打上げが、東西の軍事的バランスを東側に有利に好転せしめたとの解釈を述べたものだが、実はこのミサイル開発の成功はドイツ人捕虜の仕事であった。ドイツは戦時中ピーネミュンデのミサイル研究所で、ロンドンに打込んだ短距離のV2までは成功したが、それ以上には進みえなかった。戦時中ピー

ネミニンデを占領したスターリンは、研究所員全部六〇余名を捕虜として、非常な優遇を与え、経費などお構いなく、自由に研究を継続せしめた成果である。一方、原爆を独占していたアメリカは、他の運搬道具たる飛行機の発達に専念したことが、ソ連に一步遅れた理由である。やがてソ連に追いつき、追いついて人類最初の「月旅行」に成功したのである。

五 モスクワでの毛沢東はいささか上機嫌で一月一日ソ連留学中の中国学生たちの会合において、「私の見解によると今や国際的事態は新たな転換点に到達している。今日世界には東風と西風との二つの風がある。中国の諺に「東風が西風を圧倒するか、西風が東風を圧倒する」かとある。今日の事態の特徴は私の信ずるところによると東風が西風を圧倒しつつある。これは社会主義の勢力が圧倒的に帝国主義の勢力に優っていることだ」とのべた。

△フルンシチョフの北京訪問

(一九五八年七月末)

一 一九五八年三月二十七日フルンシチョフは党第一書記の上に首相を兼任した。一九五八年は中国の「第二次五年計画」の初年度であって、「より大きく、より早く、より良く、より経済的結果をうるため社会主義を建設せよ」とのスローガンをあげた。五月二六日李富春、陳雲、葉季壮がモスクワを訪問し、フルンシチョフと会見して新たな「経済援助」を懇請したが不成功に終わった。毛沢東は失望のあまり「苦斗三年」のスローガンをかかげいわゆる「大躍進」運動を開始した。

二 一九五八年七月三一日から八月三日までフルシチョフは国防相マリノフスキー元帥を帯同して北京を訪問し、毛沢東(周首相、彭徳懐国防相、陳毅外相同席)と会談した。第二回目の北京訪問だが、この秘密旅行の使命は、太平洋水域で作動するソ連の原子潜水艦隊との通信を保持するため、中国政府の許可をえて中国領土内に無電基地を設けると同時に、ソ連は中国のため潜水艦建造の設計図と技師を送る提案を、ユーゲン大使を経て中国政府に行わしたところ、毛沢東は激怒しこれは「中国の民族的矜持と中国の主権を侮辱するものだ」峻拒したので、この問題解決のためフルシチョフが派遣されたのだが毛沢東は対案として「ソ連は中国に借款を与え、中国自身に無電基地を建設させよ」と提議した。フルシチョフが直ちにその対案に同意したのでこの問題は解決した。しかしソ連は今一つ中国に要望があった。それはソ連の海軍が中国の港で潜水艦に「給油」し、乗組員に「上陸休養」を許すことであった。毛は即座にこの要請を拒否し、「ソ連の潜水艦が中国港への接近は、中国の主権侵害だ」と答えたのでそれから中国の潜水艦に北極圏のムルマンスク港(ソ連唯一の全年不凍港)の利用と交換に、中国港の使用を許されたいと申出たが、毛の回答は「すべての国は自己の武力を、他国の領土でなく、自国の領土内に保持すべきだ」との厳しいものであった。フルシチョフによると、潜水艦との通信問題は後に人工衛星の開発によって解決されたとある。フルシチョフ一行が北京を去ると間もなく、八月二三日から金門、馬祖に対する猛烈な砲撃が開始された。「ソ連側では全面的に同意したわけではなかったが、しかし八月三一日「誰れでも中国を攻撃する者は、同時にソ連を脅威することを忘れてならない」と声明した。

三 一九五八年八月二九日中国共産党は農村に「人民公社」を建設する決議を行い、「社会主義建設を促進し、社会主義を予定より早く完成し、共産主義への漸進的移行を実行する。中国における共産主義の実現は遠くない」と宣

言した。人民公社の中ソ紛争における意義は、それが中国の経済的後進性の突破に役立つか否かではなく、中国がこの改革から引出さんとする遠大な「政治的結論」であった。四〇年以上もの工業的発達にかかわらず、ソ連はなお「共産主義」に接近したとはいえないにかかわらず、一〇年にも足らない中国が共産主義の門口に來たとは、ソ連に対する甚大な挑戦である。フルシチョフはハンフリー上院議員に「人民公社は旧式」で「反動的」なものだと批判している。

四 一九五九年一月末開かれたソ連の第二一回共産党大会は特に「共産主義建設者の大会」とよばれ、フルシチョフは資本主義から共産主義への進歩の段階にはスキップは許されないこと、その過程は長期で漸進的たるをさげえないこと、共産主義出現を促進する確実な唯一の途は、物質的財貨の生産を増加するにあるのみだと声明し、同年二月七日ソ連は前年八月合意した中国への四七の追加プラントに、更に三一の工業プラントを追加することに合意し、総額十二億五千万ドルに達する援助を中国に与え、中国側は「物資」をもって返済に充てることになった。しかるにソ連は「一九五九年六月二〇日原子爆弾製造に関する秘密を中国に与える協定を一方的に破棄した」。その経緯に関しフルシチョフによると「中ソ関係決裂以前には、ソ連は中国の要請する殆んどすべてを与えた。中国に対しては秘密はなかった。ソ連の核専門家たちは、原爆の製造に忙しい中国の技術者や設計者に協力した。ソ連は中国の科学者たちをソ連自身の研究所で訓練していた。ソ連の専門家たちは中国に原爆の『原型』を与えると提議し、その原型を包装して中国に送り出す準備をしていた。その時点で私は核兵器担当の大臣からその報告をうけた。その大臣は中ソ関係が絶望的悪化に陥っているのを知っていた。その大臣は私に原爆の原型一個を中国に送る訓令をうけているが、その積出しの準備は終っている。どうすればよいか、貴下の訓令を仰ぎたいと申出た。私は会議を召集し、もしソ連が原

爆を送らなければ、中国はソ連を条約違反者と責める。しかし一方中国は既にソ連を誹謗するキャンペーンを始めているのみならず、同時に信じられないあらゆる種類の「領土」の要求をも始めている。ソ連としてはいかに侮辱されてもソ連は中国の忠実な奴隷だと中国人に考えさせさせなければならないので、結局原爆の原型の送付は延期することに決定した」とのべている。

五 一九五九年八月七日中国とインド間に国境紛争が勃発し、中国軍のインド侵入事件に發展した。九月九日ソ連は中印国境紛争に関する声明を發表し、「ソ連は中印兩國とは友好關係にあつて、中ソ兩國民は社會主義的國際主義なる偉大な原則に基く、兄弟的友情の不滅な紐帯によつて結ばれている。他方ソ印兩國間の友好的な協力は平和共存思想に從つて成功裡に發展しつゝある。ソ連の支配者間には、中印兩國政府が兩國人民間の伝統的友好精神に基く相互の利益を考慮して、誤解を調整するものとの確信が表明されつゝある」とのべた。後日、中国側はソ連のこの声明が「中ソ間に紛争」の存在を外部の世界に洩した最初だと聲明している(一九六三年二月二七日)。

六 一九五九年九月一五―二八日間フルシチョフはアイゼンハワー大統領の賓客としてアメリカを訪問した。いわゆる「キャンプ・デービッド會談」が行われた。フルシチョフは五月二八日帰国直後九月三〇日「北京を訪問」して毛沢東と會談し(第三回目で兩人最後の會見)歓迎宴の席上「私はアイゼンハワー大統領との會談で大統領が國際的緊張緩和の必要を理解している印象をうけた。われわれは現代の事態を現実に考え、正しく理解せねばならない。われわれが強いからといって、武力で資本主義制度の安定性をテストする必要を意味しない。われわれは「解放」のための正義の戦争のみを認め、征服的な帝國主義戦争を非とする。社會主義のごとき崇高な進歩的の制度といえども武力で押付けえない。それは人民自身が決定することこそ神聖中の神聖だ」とのべた。キャンプ・デービッド會談に対

する中国側の批判は「ある同志たちの頭脳は転換し、中国共産党の内外政策に対する公然たる攻撃が次第に不節度になった。かれらは公然と中国共産党は武力によって資本主義制度の安定度をテストせんとしているとか、鬪鶏のごとく戦争を熱望していると悪口をいった。かれらはまた中国共産党の社会主義建設の一般的路線としての「大躍進」、「人民公社」を攻撃し、中国党は国家の方向に冒險政策を実行しつつあると罵倒した」とある（一九六三年二月二七日の「人民日報」）。

△第三回ルーマニア共産党大会

（一九六〇年六月）

一 一九六〇年六月二〇日からブカレストで第三回ルーマニア党大会が開かれた。小国の小党の常例的な会合なので、共産陣営以外の共産党でリーダー格の代表を送った党は殆んどなかった。フルシチョフ自身も六月一八日まで出席を決定していなかったところ、この日彭真（中国共産党一二人の最高幹部の一人で北京市長）を団長とする中国代表団の一行がブカレストへの途上モスクワを訪問したので、フルシチョフは急遽ポーランドのゴムルカ、チェコのノボットニー両党首らを誘って会議に赴いた。

二 大会は最初の三日間公開で、フルシチョフも彭真も演説したが、おだやかな調子であった。しかし注意深い耳には相互に批判的であることが窺われた。フルシチョフは「帝国主義」に関しレーニンの言葉を機械的に繰返すのは子供だと攻撃し、現在の状況下で「戦争を不可避でない」と考えない者は理解力をもたない者だと酷評した。彭真は

「帝國主義」は信用できないとの古いテーゼを繰返し、この言葉の意味を強調するためU₂事件とパリ巨頭会談の流産とを利用することができた。彭真は特に当時アルジェリアとキューバとに荒れ狂いつつあった鬭争を援用し、戦争を避ける最善最確実な方法は、到る所の「解放運動」と「革命鬭争」とを援助するにあると主張した。かれはまたおなじみのチトー攻撃を活発に繰返し、帝國主義者たちは共產陣營の統一を破壊せんがため、近代的修正主義者たちを使用しつつあるとのべたが、かれの演説全部に一言も「平和的共存」に触れなかったのが目立った。

三 フルシチョフの補佐官ポノマレフが引受けた全世界の共产党代表たちと接触する仕事がか最も困難であった理由は、かれらの大多数が毛沢東を最も深く尊敬していながら、中ソの裂け目がどこまで広いものかを知らないことにあった。ポは六月二二日と二三日の両日秘かに代表たちのグループと面会し、「紛争の性格とソ連の立場」とを報告した。その報告は「戦争」と「平和的共存」とに対するモスクワと北京との対立的態度を強調したもので、特に核戦争のおどしがフルシチョフの切札であった。ポは代表者たちに中国の向う見ずな態度を警告した。それがためかれは再三再四、善良なレーニン主義者の間では、中国の見解が広汎な同情をかちとりうると期待される、より基本的な意見の不一致をかくすことができたのである。先是、六月二一日ポノマレフは、大会参加の代表全員に八〇ページの長文な回状を配布したが、主として中国人の思想とその行動の一部とを批判したもので、「一九五七年のモスクワ宣言」を試金石として、中国がその宣言に含まれたイデオロギーから離れていると責めたものであった。それは恰も全く同一の行為に関し、中国自身がソ連を責めつつあったことと同じであった。代表たちの大部分は共產主義運動の二巨人が根本政策の幾点かに関し甚しく仲たがいしていることに、深いショックをうけたが、回状にはなら暴力や感情の表出を予期とするものはなかった。ともかくこの回状はソ連の戦略と目的とを忠実に反映したものであった。

四 六月二五日大会そのものの終了後、ソ連の要求によって「私的会合」が招集され、各自二〇分の制限時間で、全世界の党代表たちは終日演説を展開して公式コンミュニケを支持した。彭真は北京と協議するまでコンミュニケに調印を拒否した。ソ連の解釈に賛成して中国に反対した国は、フランス、イタリー、イギリス、アメリカ、ベルギー、日本、スペイン、東ドイツ、フィンランド、アルジェンチン、チリ、ウルガイ、シリア、イラン、モロッコの一五カ国であつて、すべて単調な各党の「統一」に訴えるか、中国の遣方、その政策を質問するか、多少激しく批判したものであつた。矜持をもつた古い文明を代表する彭真は、坐して聴聞する外なかつた。彭真の回答は中国に対する批判の多くは不公正であつて、真実の一部のみが明かにされ中国党の見解はどこにも表現されていない。中国はいかなる方法でも「共存」に反対したことはなく、中国自身これを実行している。世界労働組合連盟とのトラブルは、かれらが中国の工業的および農業的進歩をあざけたためであつて、それが不愉快な事態に導いたのであるとのべ、「平和と戦争」の問題に関しては、もちろん中国は常に平和のために闘つてきた。現に中国はフルシチョフの「アメリカ訪問」を支持し、またパリの巨頭会談でフルシチョフがとつた立場を支持したではないか。しかし彭自身としては「帝国主義者たちが、戦争を開始しないとの見解には同意できない」とのべ、アメリカが日本と西ドイツとを「武装」させつつあるのは、両国人を中国人と一緒にメーデーの祝いに合流さすためでないことはたしかだと揶揄し、これ中国が常に戦争の阻止と敵に直面する準備をしなければならぬ意味である。この態度は完全に「一九五七年のモスクワ宣言」に合致すると声明した。

五 彭真の演説で事態は一応収つたのだが、この日著しくフルシチョフを怒らせた事件が持ち上つた。それは彭が六月二一日のソ連回状に対抗する運動として、中国自身の文書を提出したことである。それはソ連党が中国党に送つ

た八〇ページ以上の「私信」の反訳であった。これが各国党の代表にソ連の態度と遣方とに關し、新しい光を投げかけたわけは、六月二一日のソ連回状がレーニンの流用語で綴られた、品位ある道理を説いた文書であったのに反し、この私信は中国人のみを相手にしたもので、しかもその調子は弱い者いじめ的な辛辣なものであり、その構成もフルシチョフ自身の演説のごとく締りのない広い範囲のものであった。しかし論争を高度なイデオロギー的水準に維持せんがため、あらゆる種類の問罪を投入し、若干のものはイデオロギー論争とは全然無關係な、むしろ「権力關係」とか、「國家間の對抗」に關するものであった。この私信はまたインドやアルジェリアに對する中国の政策を直接攻撃するとか、中国の行動は共產主義者の平和に對する願望をブルジョア世界においてすべての信頼を破壊さすとか、更に事態を悪化さすことはアジア、アフリカの人民たちをして共產主義に對し高度な疑念を引起さしめるとか、中国人は共產主義者たる以前に民族主義者だと攻撃するとか、また中国は軍事上の問題に關しソ連と完全な協力を拒否していると激しく責めている。この私信はあたかも反抗的な子に直面する怒れる父の爆發であって、最も驚くべき方法で、北京に對するソ連の態度の暗黒面を明かにし、折角ソ連人が兄弟党の仲間に丹精こめて創りあげた、印象を台なしにしたのである。

六 六月二五日彭真が發表した中国あてソ連の「私信」はかれがブカレストに出発以前予め北京で反訳し、中国最高幹部の權威下に行われたものでなければならぬと推察したフルシチョフは、これに對する唯一の回答は全面的攻撃にあると決意し、翌六月二六日の第二回秘密會議においてこれを行った。中ソ兩党間に係争中の課題は単に中ソ兩党間の意見不一致のみでなく、中国党と他のすべての党との意見不一致である。小党も大党と同等の發言権をもつとのべ、毛沢東を名指しで攻撃し、毛は事実上第二のスターリンであつて、かれ自身のこと以外いかなる利益をも忘

れ、近代世界の現実から離れた理論を喋々と語っているのだ。毛は超左翼になり、超独断家になり、真の左翼修正主義者になっている。中国人は「戦争」について多くを語っているが、事実かれらは近代戦争の意義を理解してないとのべ、転じて「インドとの国境紛争」問題に移りソ連が中国を援助しなかったことで中国人を失望させたとの中国側の苦情を断然拒否し、事実、社会主義の大義を失望させたのは中国であったわけは、中国がインドと争い、インドの社会主義化にロシアと提携しないのみならず、反対の行動をとったからである。もちろんネール首相は資本家だが、かれと中国との紛争は、資本主義や社会主義とはなんの関係もない、純然たる民族主義者の争いであって、社会主義の大義に計り知れない損害を与えている。かかる状況下でソ連が中国を援助しなかったことに、彭が不平をいう権利がどこにあるか。ソ連はイランとの間に国境問題をもっているが、責任ある方法で処理している。もし中国流の政策をとれば一再ならずイランと戦争しなければならなかったとのべ、更にソ連が「個人崇拜」を攻撃する問題に、中国が疑問を投げかけたことを非難し、また中ソ間の軍事的協力に関しソ連が「満州国境」に敵に対して使用する「無電の伝達機」設置を阻止し、またソ連機の「偵察飛行」を妨害することによって、ソ連の国防措置を妨げたと激しく苦情をのべた。最後にかれは彭徳懐がソ連共産党への書簡で「人民公社」を非難したため労役場に送られたことを責め、ソ連は「人民公社」にも「大躍進」にも賛成していないが、それを口外したことはない。またソ連は百花斉放政策も誤りだと信じているが口外してはいない。一国の経済発展は規則正しいもので、飛躍してならない。ロシアでは発展の速度を強制した結果ストライクを引起したことがある、と興味あることをも付言した。

これに対し彭真はフルシチョフがこの会合を組織した唯一の目的は中国共産党と毛沢東とを攻撃し、中国党の権威を覆えさんとする努力を包みかくさんがためだと攻撃し、毛沢東が現実から遠のいているというが、事実かれはフル

シチョフよりも遙かに密接に近代世界に触れている。フルシチョフは「修正主義者」であって、帝国主義の眞の性格に幻想をいただき、帝国主義の本当の力を過小評価している。中国党は一般情勢に関するフルシチョフの分析を全然信じていない。フルシチョフの政策、それは一体なにか。帝国主義の力をほめたり、けなしたり、定見のないのが、かれの習慣だと鋭く攻撃し、かかる戦術は大衆の闘争を著しく阻害すると説き、転じて「近代戦争」がどんなものかの理解は、中国人は朝鮮戦争、日本との戦争によって、世界の他のいかなる人民よりも、より多い体験をもっていると結んだ。

△ソ連建国四三周年記念大会

(一九六〇年十一月)

一 一九六〇年十一月一日—二月一日モスクワにソ連政権生誕四三周年記念大会が開かれ、全世界八一カ国の共産党代表(党員三千六百万)が参集し、六〇年以前のマルクス「共産党宣言」に次ぐ「新共産党宣言」を採択し、どこまでマルクスの原宣言が予見した資本主義の衰退と崩壊が現実化しているかを明かにした。大会では大小国すべての代表全部に発言の機会を与えたが、肝心な場面は中ソ兩國間の見解の対立であった。中国代表は少数の支持をうけたのみであったが、頑強に自国の立場を主張し、爾後激化する中ソ間乖離の分水嶺を構成するに至った。

二 十一月四日中国代表鄧小平が展開したテーゼによると中国は「一九五七年宣言」を支持するものだが、主義に関する若干の問題が未解決なので、できれば全部の合意をえたい。それには特に妨げになることはソ連が十一月五

日中国の指導者特に毛沢東を攻撃した書簡を、各党に配付したことだが、この書簡はソ連代表の公式演説よりも遙かに重要である。しかし「その書簡は中国の立場を偽り伝えた議論を集めたもので、事実においてウソである」と大胆な言葉を吐いた。クランクショーによると「これが異常な瞬間」たるわけは、クレムリンの大殿堂内において世界各国からの同志の面前で、公然とソ連の最高指導者を「ウソ」つきだと言いつ放ったからである。

三 鄧代表が取上げた最初の問題は「戦争と平和」の問題だが、かれは決して「世界戦争」のみならず、いかなる戦争も「不可避」だと言ったわけではなく、ただ帝国主義者を知る者にとって、残念ながら戦争は「ありそうだ」と言ったのみであった。戦争が起るか否かは全く社会主義者の陣営の掌中にあるのではなく、それは帝国主義者の参謀本部に依存する。鄧の言ったことはもし帝国主義者が核戦争を開始したならば、選択は降参か、頑強な抵抗かであるが、共産主義者にとって選択はありえない。抵抗して勝利をうるのみだ。資本主義が存在する限り、もはや戦争はありえないと決して言いえない。「地方的戦争」に関しては事実既に発生している。故に共産主義者たる者は漠然と「すべての地方的戦争」に反対と声明することはできない。そのわけは「正義にかなった地方的戦争」は支援しなければならぬ。また「反革命の地方的戦争」も闘わねばならないからである。殊に「地方的戦争は必ず世界戦争に導くというのも真実ではない」。現にソ連自身報復的行動をとると脅威して、スエズとキューバが大戦争に発展することを阻止してはいるではないか。なぜそう驚くのかとのべた。

四 鄧代表は更にわれわれは全力をあげて世界平和を確保せんと試みつつあって、そこには平和のための完全に立派な世界戦線がある。その戦線にはソ連を先頭とする社会主義陣営、旧植民地諸国家（それには中立主義国と同盟諸国がある）、資本主義諸国自身における反帝国主義分子が含まれている。しかしブルジョア政治家は含まれていな

い。世界平和戦線は帝国主義の政治家の善意の上に築きあげえない。それと同時に「兵器」は必要である。全面的軍備撤廃を語ることは不正直で人を誤らせるものだ。帝国主義が存在する限り、軍隊は国家の不可欠な道具として残される。「軍隊なき世界は国家なき世界である」。平和的共存政策は、社会主義国家と共産党との外交政策の単なる一部でしかありえないと主張した。

鄧代表は更に後進国における「民族解放」問題に対する中国の態度を定義せんと試み、インドに例をとり、今やネール首相は右翼に転じ、かれ自身の人民の最後の審判日を引延すため、中国との「国境紛争」を製造しつつある。この種の事態に直面した中国は、ネール一派に反対するため他の共産党に支援を要求する権利がある。「しかるにソ連共産党は、支援するどころか、インド政府の味方になって、兄弟党間に不和を生じ、中印関係を悪化させた」と直言した。

そこで鄧代表はこの種の事態に善処する正しい方式として「統一闘争」と「闘争統一」とを提唱した。前者は右に傾く者と「闘争」して左に傾く者との「統一」を意味し、後者は闘争後左に転向したいかなる者とも統一することを意味する。インドに関するこの一節は極めて重要な一節であって、レーニン主義者の態度に関する古典的説明であり、中国以外の世界共産運動が、どこまでレーニン主義に接近しているかを考える場合大切な点である。

五 鄧代表は次に「共産主義は暴力なしに達成できる」との第二〇回ソ連共産党大会のテーゼに極めて深刻な疑問を抱いていた。この問題に対し鄧は最も堅苦しい態度をとり、「ある一つのテーゼの確実性は、同じ法式を絶えず繰返すことによつて立証されえない」と主張し、ソ連共産党は社会主義に「移行」するに当り、「議会」の役割を甚しく過大評価していると同時に、「権力」を奪取するに「平和的と非平和的」との二つの場合を準備する必要を否認し

ている。しかし共產主義者による「平和的行動」は、堅固に身を守っている「官僚」の勢力によってますます制限されている。それだから平和的手段によって権力を獲得するチャンスはより大であると提唱することは誤りである。戦術的見地からは平和的手段によって権力を獲得すると主張するのは正しいが、われわれは自分自身のスローガンにだまされてはならない。われわれはすべての場合に準備しなければならない。「革命は輸出できない」というのは尤も至極だが、社会主義陣営は「解放のため闘争」するすべての人民を援助しなければならないと主張した。

六 次に鄧代表は中国共産党は同志的な批判は歓迎するが、ソ連の同志が中国の「人民公社」を「失敗」だとし、中国を饑饉の瀬戸際まで持ち来したと言うのは幻想的である。たとえ仮面をかぶった言葉にせよ、中国を責めることは、アジアの大衆の面前で共產主義の信用を落す奇怪千万だとし、叙情詩的贅辞で「人民公社」は中国人民を泥土から引上げた驚嘆すべき業績だと、毛沢東は中国の靈感であり、指導的光明だとし、現在かれは日常の国務から離れているが、毛の言葉は殆んど神秘的な熱情をもつと礼賛した。中国共産党はマルクス・レーニン主義の普遍的真理を、中国の具体的事態に適應させたのみで、「マルクス主義を中国化したのではない」。何人もかつて毛沢東を汚すことに成功しなかった。中国の党と人民とを統一したのは毛である。われわれに行く道を示したのも毛沢東であると主張した。

最後に鄧代表は中国が「フラックシヨナリズム」(小部分に分かれること)を進めつつあるとの告発を一掃せんと試み、中国人が本当に行いつつあることは、各国共産党間の関係の手本を樹立せんとしているもので、それは他日中国共産党がソ連党と比較してより強大になった場合、「世界共産運動の指導権が北京に移りうる」とのことである。鄧代表をして極端にこの問題を固執せしめたわけは、ソ連党がこの瞬間中国党を激しく攻撃しつつ自己の指導的役割

を再主張していたからであった。しかしフルシチョフが公式にはソ連がもつ指導者たる称号を失うことを心配していたので、中国党は争いはしたが、これを抑ええておくことに全力を尽したのである。

七 しかし指導的な党は存在しなければならないので、それはソ連党だが、同時に各国間に「完全な平等」がなければならぬ。批判を行うことは統一と両立しないことではない。フラックシヨナリズムに関してレーニンが言ったことは、個々の党の政治的路線にのみ適用されるもので、各国の党と党との関係には適用されない。党と党との関係においては、優者もなければ劣者もないのだから、少数が多数に服従を要求される理由はない。ソ連党はかれら自身の党大会で採用した若干の決議に異議を唱える中国党を、フラックシヨナリズムと批難するが、ソ連党自身の決議に拘束されうるのは、ソ連党のみであって、ソ連党が他党をも拘束せんと試みることは、各国党間の規律に違反する。理由はもしソ連党が自己の党大会で採用したすべての決議が、他党をも拘束すると主張するならば、兄弟党間の「平等」はありえないからである。それともわれわれは「父の党と子の党」なる新概念を承認しなければならないのか。少数グループの活動を非難する決議草案の背後にある目的は、中国共産党の地下に爆弾を置かんとするもので、それ以外のなものでもない。われわれは降伏しなければならぬのか。なおもし中国党がそれ自身の見解を流布せんとしたことが、フラックシヨナリズムの罪になるのであれば、レーニン自身もフラックシヨナリストであった。レーニンは社会民主党をボルシェビークとメンシェビークとに分裂さすことによつて、最終的には多数を獲得するために、当初は少数のフラックシヨンを組織したのであった。中国党も均しくこの種のフラックシヨンを組織する平等な権利をもっている。歴史は現在少数である中国党が誤っているか否かを告げてくれる、と声明したのであった。

これは正に「戦争宣言」である。今日まで数十年間モスクワから押付けられ、神聖な文書によつて支持された、鉄

の規律と絶対的統一とに依存してきた世界的運動のうちにあつて、中国共産党がその序列から脱出して自己の路線を開発し、自己の好む伝道を行なつて興味をそそり、少数を多数に転じ、最後に多数を獲得するに至らば、指導党としてのモスクワを相続する権利を宣言したものである。中国共産党総書記鄧小平が毛沢東の祝福をうけて表明した、中ソ両国共産党間の分裂宣言である。

しかし当時の中国はなおソ連の「物質的援助」を求めること急であつたので、公然と会議を脱退することは戦略的には最大の過誤であるため、中国は共産主義運動を二つに分裂させた全責任を一身に負担したのである。なおモスクワのこの大論争はブカレストのそれと同様に、極秘裡に行われ、八一カ国の党首脳部を除けば、一切外部には知られていなかった。中国もモスクワのこの「八一カ国宣言」には調印を決意したが、それは「二年以内」にすべての党が再び正式会議を開くとの了解が条件であつた。

八 モスクワ秘密会議の内容は翌一九六一年一月フランス共産党首トレーズは極めて明瞭かつ簡潔に中国が両国のイデオロギー論争たるべきものを、共産主義と無関係な「国家関係」に移入したことを激しく非難した。更にベルギー共産党はモスクワでの鄧小平演説をパラフレーズして中国のテーゼによると、われわれは第二〇回ソ連共産党大会の教訓が、あたかも全世界の共産党運動に有効であるかのごとく言及することを止めねばならない。第二〇回党大会以来、ソ連党は世界共産党の大多数を帝国主義への降伏の途に導いてきたとのべ、中国の見地からすると「個人崇拜」の非難は無用、「第三次世界大戦」の防止の可能性と必要性とを拒否し、「社会主義への移行」に異なつた途の存在を疑問視し、若干の国で一定の条件下に「労働階級」が無血で権力を獲得しうることをユートピアだとするにあつたとのべている。

以上ブカレストとモスクワの二回の正式会議における討議の内容は、外部の世界にはかくされ、二年後の一九六二年一二月に至って、先ずソ連、次に中国が両国間に分裂の存在を承認し、以後両国の討議は半ば公開で行われ、一九六三年三月また新しいクライマックスに達した。それは中国が「人民日報」と「紅旗」とで、マルクスとレーニンの「真の相続人」はロシアではなく、中国だと主張し、従って世界共產主義の「真の本部」は北京だと要求したからである。

九 一九六〇年六月一七日ソ連政府は中国政府に対し、一カ月以内に中国で作業中のソ連専門家一、三九〇名を引揚げさせ、三四三項目に関する契約書と契約補充書とを破棄し、更に二五七項目の科学技術協力に関する協定の廃棄を通告した。

八月一三日北京からの情報によると、ソ連の技術者とその家族たちの北京その他の工業地域からの出発者は増大した。北京の外交界では公然とこれは全く旧約聖書の「出エジプト記」だと語られる程度に達した。しかもこの「出国」はソ連で訓練中の中国技術者の「帰国」と同時になったので、政治的意義を与えないことは困難だ。この出国の根底にはイデオロギー論争があるようだが、もしこれが継続すれば、中国の経済にギャップを残し、これまでの進歩を危殆ならしめると伝えた。

△原子爆弾は張り子の虎

一 毛沢東は一九四六年アメリカの女流記者アンナ・ルイーザ・ストロングとの会見において、「アメリカが原子

爆弾を使用すると想像すれば」との記者の質問に対し、「原子爆弾はアメリカの反動主義者たちが人民をおどすために使用する張り子の虎である。恐ろしいものに見えるが、実はそうでない。もちろん原子爆弾は大量殺戮の兵器であるが、戦争の結果は『人民』によって決定されるのであって、一つ二つの新型兵器で決定されるものではない。すべての反動主義者たちは張り子の虎である。外観的には、反動主義者たちは、こわがらせるが、現実にはかれらはそう強力でない。長期的見地からすると、本当に強力なのは『人民』であって、反動主義者ではない。アメリカの反動主義者もまたすべての張り子の虎である。アメリカの帝国主義についていえば、それは恐ろしく強いもののように感じられている。中国の反動主義者たちは、中国人民を驚かさせるために、アメリカの力を使用する。しかしアメリカの反動主義者たちは、歴史上におけるすべての反動主義者たちと同様に、大きな力をもっていなかったことが立証されるだろう。アメリカには本当に強いものが外にいる。それは『アメリカの人民』である。中国の例をとれば、われわれがたよりにしているものは、キビとライフル銃のみであったが、歴史はわれわれのキビとライフル銃が、蔣介石の飛行機や戦車よりも遙かに強力であったことを最終的に立証している。中国人民はなお多くの困難に直面し、アメリカの帝国主義と中国の反動主義者たちとの合同攻撃によって、長く苦難を蒙ることだろうが、これらの反動主義者たちが敗北して、われわれが勝利する日の到来を待っている。その理由は簡単であって、すなわち反動主義者たちは、反動を代表し、われわれは進歩を代表しているからだ」と答えている。

二 毛沢東はまた一九五七年一月一日モスクワで、ソ連に留学中の中国学生に対し、すべての有名で強力な反動主義者たちも、単なる張り子の虎にすぎない。理由はかれらが人民から分離されているからだ。蔣介石は四百万以上の正規軍をもっていた。われわれは九十万のゲリラ部隊をもつにすぎず、しかもその全部は蔣介石軍によってそれ

ぞれの基地地区に分断されていた。しかし蔣は張り子の虎にすぎないから、かれを敗北さすこと確実だった」と説明し、更に次のごとき極めて貴重な戦争指導哲学を付言している。「われわれは長期間敵と闘争する場合、『戦略的』にはすべての敵を軽蔑しなければならないが、『戦術的』には敵を全く真剣に取扱わねばならない。これはまた『全部』に関しては敵を軽蔑しなければならないが、各個の具体的問題に関しては、敵を慎重に取扱わねばならないことを意味する。もし全部に関して敵を軽蔑しなければ、日向見主義の誤を冒さざるをえない。マルクスとエンゲルスは二人の人間にすぎないが、かれらは早くから資本主義は全世界を通じ転覆されると宣言している。しかしわれわれが具体的な問題と特定の敵とを取扱う場合、それらを慎重に取扱わなければ冒險主義の誤を冒すことにならざるをえない。戦争においては、戦闘は一つづつ闘いうるのみであり、また敵の勢力は一つづつ破壊しうるのみである。工場は一つづつ建設しうるのみである。農民は土地を一区づつ耕しうるのみである。同一のことは食事についても眞理である。戦略的にはわれわれは、食事をとることを軽くみなす、すなわちわれわれは食事を終えうることを知っているが、食事をする現実の過程においては、一口づつ口に入れるのであって、食膳の全部を鵜呑みにすることは不可能である。これが『断片的解決方式』と知られるもので、軍事的な語法によると、敵勢力の各個撃破とよばれるものである」と教えている。

△総括

本論文は一九四九年一〇月中国大陸に共産政權が生れてから、その政權が先輩格たるソ連の共産政權との間に「違

和」を生じた確定時として、専門家が認める「一九六〇年一月」までの経緯を略説したものである。この違和はフルシチョフ時代に発生したのだが、一九六四年かれの退陣後に出現したブレジネフ治世になっても相続され、衰退しないのみか却って激化された時機すらあって今日に及んでいる。違和を生んだ根本的事由に関しては、デービッド・フロイドの分析によると、(一) 経済的にソ連が比較的富み、中国が比較的貧乏たること、(二) 軍事的にソ連は超大国の一たるのみならず、殊に核兵器製造でも中国の先輩で、その秘密伝導を中国に公約しながら、一方的にこれを破棄し、中国をして自力開発を余儀なくせしめたこと、(三) かく中ソが世界的地位を異にするため、世界から平等に取扱われないこと、従って両国は外交問題に見解を異にすること、(四) は革命の年齢差であって、一九六〇年の時点でソ連は四三歳の壮年だが中国は一一歳の少年にすぎず、従って中国は革命の生長、拡大、完成にはなお戦闘をつづけねばならないが、ソ連はその必要がより少く、全世界に革命勢力を拡大せんとするにも、危険のより少ない方々に訴えがちなこと、(五) 共産革命の主役の閥歴が異っている。毛自身が当時存命中の世界最大の革命家たることは何人も争いえないが、かれの思想の深遠性とか、マルクス主義革命理論への独創的貢献などは過大評価してならない。これに反しフルシチョフの生涯の大部分は現在の体制を転覆する革命を闘うことでなく、新しい社会の創造と統治とに費されている。革命闘争に限る限り、フルシチョフは毛沢東の先輩的地位を承認しなければならぬこと、(六) マルクス・レーニン主義なるイデオロギーの存在が、あらゆる「政治的問題」に対する回答を与え、その名において語りまた行動する者たちに、絶対的権威を与えると「想像」されることが、中ソ間の紛争を明瞭にせず、却って陰蔽するに役立っている。故に外部の世界ではロシア人と中国人は「思想」問題を論じているので、実際の「政治」を論じているのではないとの印象を与えている。しかし事実イデオロギーは常に二次的役割しか演じていな

い。中ソ両国政府の政策が主としてイデオロギーで決定されると信ずる者があればそれは極端な非現実的なことである。事実両国間の紛争は、共産主義の理論がいかに「不精確」で「人を誤らせる」ものかを実証し、それがためどんな矛盾した見解でも支持できうるからである。しかしこれはイデオロギーが全然無意義というのでなく、二次的役割で、討議の手段となり、またも真の政治的問題を公然と争うのをさける秘密手段にもなっている。ともかく中ソどちらの指導者にとっても、共産主義理論の絶対的に正しい解釈だとして、人民を説得することは困難である。(七)中ソいずれが世界共産運動の指導者かの問題である。今日の共産陣営はそれを決定する機構をもっていないからだとある。姚孟軒は簡潔にして、しかも極めて充実した言葉で中ソ分裂の要素を次のごとく(一)基本的な国家利益(ナショナルインテレスト)の衝突、(二)マルクス・レーニン主義の異なった解釈から発するイデオロギー論争、(三)世界共産運動の指導権の争奪、(四)両国最高指導者の心理的、人格的相異から起る、個人的な争いの四種をあげている。

主要参考文献

- 一 David Floyd, *Mao against Khrushchev, A Short History of the Sino-Soviet Conflict*, New York, 1964
- 二 Edward Crankshaw, *The New Cold War, Moscow v. Peking*, Penguin Books Ltd., U. S. A., 1963
- 三 *What Mao Really Said*, by Philippe Devillers, New York, 1971
- 四 Yao Meng-hsian, *The Outlook for Peiping-Moscow Relations, Issues & and Studies*, January, 1977
- 五 「中ソ論争主要文献集」外務省国際資料部監修、欧亜協会編(昭和四十年三月)